『リリーのすべて』に見る「自己追求」－原作小説と映画を比べながら－

法学部政治学科４年　槌本真輝子

Ⅰ．『リリーのすべて』とは

「リリーのすべて」。1930 年代に世界で初めて性別適合手術を受けたデンマーク人、リリー・エルベの実話をもとに描かれた映画。主人公のリリー・エルベは、今から 80 年以上も前に本当の自分になるために当時誰もできなかったようなことをやってのけ、トランスジェンダーコミュニティにおいてある種神話のように語り継がれる人物である。しかし筆者は、この映画は彼女の行動によってトランスジェンダーの人々に勇気を与える作品としてだけでなく、一人の人間が、自身がどんな存在かを深く追い求め、彼女の妻だったゲルダをはじめ周りの人々の深い愛と理解に支えられて生きた、誰にでも通ずる不変の物語でもあることを主張したい。

本作でメガホンをとったトム・フーパーはこの作品の脚本を読み、3 度涙したという。普段脚本を読んで涙を流さないという彼に、何がそうさせたのか。彼がこの作品を作り上げた意図について考える。雑誌“SETDECOR”のインタビューにおいて彼はこう語る。

“To me, THE DANISH GIRL shares with THE KING'S SPEECH that theme of the blocks that lie between us and the best version of ourselves – and how we overcome those blocks. The film tells the extraordinary story of Lili Elbe, one of the world's first people to undergo gender confirmation surgery, and the powerful love story of two people who go through Lili's journey together. It movingly portrays a marriage going through a profound transformation:”

（私にとって『リリーのすべて』には『英国王のスピーチ』と同じように、我々と理想の自分との間に横たわる隔たり、そしてその隔たりをどう克服するか、というテーマがあります。また、この映画は世界で初めて性別適合手術を受けたリリー・エルベの驚くべき物語と、彼女の壮大な旅を共にした 2 人の力強い愛の物語を描き、目まぐるしく変化する結婚生活を感動的に描いています。）　(1)（SETDECOR 2015 より引用 訳・注は引用者による。）

トム・フーパー監督は、この脚本を初めて読んだ時からリリー・エルベという一人の女性の生きた証である物語を、自己追求と不変の愛の物語と捉えていることがわかる。また、同誌でフーパーは、

“I didn't want to make a film that was only about the pain,” says Hooper. “Where someone might watch and think, ‘God, becoming a trans woman for Lili was a painful thing from start to finish.’ I didn't want the audience to feel sorry for her. I wanted people to understand the

joy and release in the journey. It wasn't a man transforming into a woman; it was a woman who had been living as a man:"

（痛みだけの映画を作りたくなかった。…「リリにとってトランス・ウーマンになることは、最初から最後まで苦痛だった」と思う人がいるかもしれない。しかし観客に彼女をかわいそうだとは思ってほしくなかった。その旅路にある喜びや解放感を理解してほしかったのです。「男が女に変身したのではなく、男として生きてきた女が変身したのだ」と。）(1)

と述べる。原作では、理解のあるゲルダの双子の弟や友人に支えられ、ひどい差別は受けず平穏に過ごすリリーだが、映画では原作にない 2 人の男性に見た目が女っぽい男というだけで難癖をつけられ暴行を受けるシーンが追加されるなど、当時の世間のトランスジェンダーに対する風当たりの強さを強調している。過酷な状況でもリリーは微笑み、女性としての日々を謳歌し、しかしゲルダへの愛も自覚して葛藤し、苦しむ。そして自分の理想に近づくために、最大の決断をするのであった。フーパーは、リリーをトランスジェンダーの主人公という記号ではなく、1 人の人間が自分の理想へ近づくために積み重ねた努力とそれを支えた周りの人間の愛に着目したのであった。本稿では、原作となった小説とフーパーの作った映画の差異や共通点を述べ、フーパーの表現したかった自己追求と不変の愛の物語について考察し、自己の追求とは何なのか考えていく。

それでは、ここで本作のあらすじを解説していきたい。舞台はデンマーク、コペンハーゲン。風景画家のアイナー・ヴェイナーは肖像画家の妻ゲルダと充実した日々を過ごしていたが、ある日妻に頼まれて女性モデルの代役をしたことをきっかけに、自分の内側に潜む女性の存在に気づく。突然のことにどうすればいいのかもわからないまま、"リリー"という女性として過ごす時間が次第に増え、心と身体が一致しない状態に苦悩するアイナー。一方ゲルダは夫の変化に戸惑いながらも、いつしか"リリー"こそがアイナーの本質であると理解していく。ある日突然気付いてしまった性別違和に苦悩する主人公はエディ・レッドメイン、一番の理解者として夫を支え続けた妻をアリシア・ヴィキャンデルが演じる。

II. 繊細な原作の世界観を映像に落とし込む映画

この映画の最も評価するべきは、デイヴィッド・エバーショフの原作『The Danish Girl』（2000 年）が著す繊細で美しい世界観をそのまま映像に落とし込んでいる点だ。『The Danish Girl』の邦訳をした翻訳家・斉藤博昭が述べるように、

一瞬だけ登場する人物も、外見や癖などの特徴が過剰と思えるほど克明に書き込まれており、翻訳にとりかかった当初は、そのあたりを簡略化しようと考えたこともあった。とくにそう感じたのは第 1 章で、アイナーが女性のストッキングを履き、グレタが彼を「リリー」と呼ぶまでの過程が、舞台となるコペンハーゲンの空気から部屋のインテリア、アイナーと

グレタの画風や性格、果ては階下の住人の声まで織り交ぜながら、じっくりと綴られていく。…これらの緻密な描写が、その後のアイナーの性の違和感、そしてグレタの献身的な愛に共感させる重要なエレメントであることが、読み進めるうちに解き明かされていく。
（『リリーのすべて』（2015）より引用）

斉藤氏も指摘する、はじめてリリーが誕生するシーンは、映画でも長い時間をかけ丁寧に描写されている。初めて触れるストッキングの化粧箱を丁寧に開き、壊れ物を扱うような慎重な手つきでストッキングを取り出すアイナーが、ゆっくりと自分の脚にストッキングを這わせ、するすると履いていく様は、男性の脚が何か魔法にかけられたように女性の脚へと変化し、観ている者を不思議な感覚に陥らせ魅了する。ここで原作の該当箇所も紹介したい。

自分のすねを見下ろすと、豆から生える繊毛のように、シルクの生地からわずかに産毛が飛び出ている。しかし、そこにはほぼ完璧に滑らかな脚があった。彼を支えるには華奢に見えたカラシ色の靴も、靴底の曲線が足裏の筋肉を伸ばしてくれるようで履き心地が良かった。
（『リリーのすべて』より引用）

この情景を完全に再現したと言っても過言ではないくらい、静謐な空間で起こる秘事は滑らかに、美しく描かれる。
次にこのシーンで着目したいのが俯瞰のショットと同程度アイナーの視点のショットが多い点だ。初めてストッキングに自分が身につけるものとして触れるアイナーの戸惑いや困惑、そしてそこに秘められた僅かな期待。全てが混ざりあった彼の視点をもってストッキングと、百貨店で妻と一緒に見たからし色の靴を身につけた足元を眺めるシーンは、思わず息をのむ美しさがある。女性である筆者にとってストッキングを身につけるという動作は普段から当たり前のようになされる日常の一部であるから、このような何気ない日常のシーンが、男性から女性へと変わるきっかけとして描かれることに新鮮さを覚える。
またフーパー監督は、インタビューでカットにこだわったことを述べている。

アイナーとゲルタは絵描きだったので、今作に関しては、画家として彼らが見ていた世界をイメージしてみました。アイナーは風景画家だったのでワイドショットで、ゲルタは肖像画家だったのでポートレートを描くようにそれぞれがいた世界を撮っています。（2）
(wotopi(2016)より引用)

確かに該当のシーンも、絵画の女性モデルとして隣に立たされた絵画とアイナーを比較できるような俯瞰ショットが多いが、やはりそれと同じくらいアイナー視点のショットも目を引く。おそらくそれはアイナーがリリーへ変化する瞬間を、手元のショットで写すことで観客を没入感に浸らせ、まるで自分も初めて滑らかな肌触りのストッキングを身につけた

のだという感覚に陥らせる一つのテクニックなのではないだろうか。
また、このシーンは音楽もかなり大きな役割を果たしたことを忘れてはならない。本作の音楽を担当したのは、アレクサンドル・デスプラ、フランスの映画音楽作曲家で主な作品は『ベンジャミン・バトン 数奇な人生』、『英国王のスピーチ』、『グランド・ブダペスト・ホテル』など。フーパーとは『英国王のスピーチ』に引き続いてタッグを組む。彼はリリーの音楽についてこう述べる。

"he wanted to create a sense of strength in the music that would reflect the strength of Lili. That Lili must emerge. Lili must come into existence:" (3) (Below the Line(2015)より引用)

(リリーの強さを反映するような、力強い音楽を作りたかった。リリーは生まれなければならず、リリは存在しなければならなかったのです。)

映画では、妻ゲルダに頼まれ、アイナーがストッキングの箱を開けて身につけ、鈍い光沢を放つシルクとレース部分が柔らかい純白のドレスを手にするまでは登場人物の動作音のみが響き渡る、ほぼ無音の状態だが、アイナーが初めてドレスを手にし、奇妙な恍惚感に囚われ、我を忘れかけてからは静かな音楽が鳴り響く。そして、夫の初めての女装にくすくすと笑うゲルダとは裏腹に、だんだん自身の奇妙な感覚から逃れられず、突然の出来事に焦燥感をアイナーが抱き始めると同時に音楽もおどろおどろしいものへと変化していく。そのシーンの音楽は果たしてどんな意図でつくられたのか。フーパーが語るには、

Desplat first composed a score with a dark and strange tone for the scene where Lili puts on the stockings, but the music implied that coming in touch with your true identity is somehow dark. Then he scored the joy of it, but that seemed patronizing, implying that becoming a woman is this pretty beautiful thing with none of the anxiety.
"In the end we both realized that the key was the score needed to combine pain and joy, anxiety and hope," said Hooper. "In the moment when she is holding the dress against herself, the music needs to talk about this door opening to a happiness that she never knew existed, but at the same time, to get through that door is going to cause her untold anxiety because she is going through it at a time when no one is going to accept what she says about herself. When we came up with the idea that the music is a negotiation between these twin poles, then he was off and running. (3)

(デプラはまず、リリーがストッキングを履くシーンで、暗くて不思議な曲調を作曲しましたが、その音楽は、自分の本当の姿に触れることはどこか暗いものだということを暗示していました。しかし、女性になることは、不安のない、とても美しいことなのだということも

暗に示しているようにも思えました。
「最終的に私たちは、痛みと喜び、不安と希望を結びつけるために必要な曲調であることに気づきました」…「しかし同時に、その扉を開けることは、彼女が自分自身について語ることを受け入れていない時にそれを経験することになるため、計り知れない不安を引き起こすことになるのです。音楽はこの二つの感情の駆け引きであるという考えを思いついたとき、彼は一斉に作曲をスタートさせたのです」。)

劇中歌は、仲睦まじい夫婦の生活を描写するシーンは明るく朗らかな曲調を、リリーとして生活する過程では静かで女性らしく、柔らかい曲調を示しているが、上述のようにアイナーが次第に自分の本当の性別に気づき始める過程では雰囲気をガラリと変え、ものものしい曲調がアイナーの焦りを際立たせる。これは、アイナーが人生で初めて抱いた性別に対する違和感は、彼が無防備な状態の時にやってきて、彼自身をとても戸惑わせたことを表現しているのだ。
そしてこのものものしいサウンドは、このシーンのクライマックスであるアイナーの中のもう１人の女性としての人格が「リリー」と名付けられるシーンを、言葉ではなく音楽だけで表現する。原作では以下のように、

アナが出待ちのファンからもらったユリの花束を、グレタはアイナーの腕に押しやった。彼はトランペット奏者のように顔を上げ、エズヴァード四世はアイナーを守るように彼のまわりで円を描きながら走った。ふたりの女性から笑いがもれると、アイナーの目には涙があふれてきた。笑い声に彼は傷ついていた。白いユリの赤錆色の花粉が、ドレスのひざあたりに落ちた。彼の性器の汚らわしいふくらみに、ストッキングの上に、そして彼の濡れた手のひらにも落ちていった。「おまえは売女だ」階下の水夫が妙に優しい口調で妻を罵る声が聞こえた。「なんてきれいな売女なんだ」　そのときグレタは、聞き慣れないほど優しく落ち着いた声で言った。「あなたをリリーと呼ぶわ」。(『リリーのすべて』より引用)

一度にいろいろなことが起こり、階下の住人の話し声までもがこのシーンに交わってくるが、一見すると何も起こっていないはずの日常がアイナーにとってはもはや何が起こっているのかわからないくらい目まぐるしく変化しているさまを、デプラの荘厳な音楽は表現している。原作と違い、限られた時間の中で一つの長編を扱う映画ならではの技法である。

Ⅲ. 鏡を通して形成される自己認識

次に特筆すべきが、原作にはない映画オリジナルのシーンである。アイナーがリリーとして装い、２人だけのゲームとして舞踏会にゲルダと出かけた日に、同じく画家のヘンリクにキスされているのをゲルダに見られ、もう二度と女装はしないようゲルダに言われ約束するも、すでに柔らかいベールの服に身を包むことにすっかり心を奪われたアイナーは２人

の家を抜け出し、かつてリリーのためにゲルダが服を選んでくれた貸衣装屋へ駆け込む。そして、鏡の前で身につけていた男性服を次々と脱ぎ捨て、むきだしの状態になって、局部を両腿の間に挟み、自分の姿を確かめる。

このシーンは、原作にない映画オリジナルで、フーパーとアイナーを演じるエディ・レッドメインへのインタビューからも分かる通り、演者にとってもあまり歓迎されるシーンではなかった。エディはトランスジェンダーの役を演じることについて以下のように述べている。

"It was a very vulnerable feeling," he says. "You're being judged wherever you go by crew and cast members. You're scrutinized." That was never more true than while filming that soon-to-be-buzzed-about scene in which Redmayne strips naked and admires himself in front of a mirror. "People think actors are always wanting to take their clothes off for the camera, like, 'I'm ready to get naked!' " he says. "But it's not true. It was as uncomfortable an experience for me as it would be for anybody."

(「とても無防備な感覚でした。どこに行っても、スタッフやキャストから評価され、詮索されるんだ。裸になり、鏡の前で自分を慰めるあのシーンの撮影中ほど、それが真実だったことはありません。「俳優が常にカメラのために服を脱ぎたがっていると思われているんだ。」と彼は言う。「でも、そんなことはない。誰にとってもそうであるように、僕にとっても不快な経験だったんだ。」)(4)(THE Hollywood REPORTER, 2015 より引用)

フーパーは、このシーンをエディに納得してもらえるように、このシーンのファイナルカットを約束し、誰よりも早く映像を見ることができ、そのシーンに対する拒否権を与えると約束したのだった。そこまでして、このシーンをフーパーが撮りたかった意図はなんなのか。理由は様々あるとは思うが、一つ提示するならば、フランスの精神分析学者ラカンが提唱した鏡像段階を示したかったのではないだろうか。

この鏡像段階とは、生後6か月から1歳半に至る発達段階のことを指し、幼児の自我は身体像を通して形成されるが、鏡像段階以前では身体像は全体として統一のとれたものでなく、ばらばらに寸断されたものであり、「寸断された身体」と呼ばれる。鏡像段階になると幼児は自分の姿が鏡に映っていることに特別の関心を示すが、これは全体としてまとまりのある身体像をみいだすことができるからであり、全体としてまとまりのある自分というものを発見することができるからである。この発達段階以前では、幼児の身体的動きはばらばらな運動をしており、この時期になって初めて統一のとれた運動ができるようになり、鏡に映った自分の姿は幼児の全体像を表すようになる。つまり、幼児は鏡像によって、初めて自己の全体像をつくりあげるようになる。この鏡像段階の論をもってすれば、鏡をもって、リリーが自分のことを認識した瞬間としてこのシーンを描きたかったのではないだろうか。

この鏡のシーンは、戸惑い、焦りながらリリーがアイナーの服を脱ぎ捨てていくも、まっさらな状態になり男の象徴である局部を隠し、自分の胸を撫でながら、安堵と歓びが混じったような表情を鏡の中のリリーに向ける。それまではリリーとして振る舞う際は、常に自身の喉仏を気にし、少し俯きながら存在していたリリーが、ゲルダがいない場で初めてみせた明るい女性としての顔だった。フーパーは、あえて鏡の前でまっさらになり、リリーが自己を認識するシーンを提示することで、アイナーとしての人格が消えかけ、リリーとしての人生がはじまり、もう後戻りができなくなりつつあることを描写したかったのではないだろうか。

また、この鏡像段階に関してはもう一つ言及したいことがある。そもそも、夫婦２人のお遊びで出現するだけだったリリーが常にアイナーの意志とは関係なく出てくるようになったのは、妻ゲルダの作品に関係があった。それまで彼女の作品は世間の評価をあまり得ず、夫の才能ばかりが評価されていた。しかし、夫であるはずのリリーを描いた肖像画がたちまち人気になり、ようやく彼女の芸術が評価されるようになったのだった。ゆえに、初めの頃は彼女の作品のモデルをするためにリリーは何度も呼び出されていたのだった。このゲルダの作品にも、鏡像段階における鏡の役割があったと考えられる。リリーと名付けられた女性の心がアイナーの中で芽生え始めた頃、アイナーは、リリーである時の記憶が抜け落ちていた。しかし、ゲルダの描くスケッチや肖像画で自分がリリーだった時を認識し、物思いに耽るシーンが映画には何度かある。アイナーは作中でゲルダに、「姿を与えたのは君だけど、リリーはずっといた。」と告げる。この言葉を作中の行動通りに受け取れば、自分の心の中にリリーという女性の人格はずっとあり、男として生きていた自分にメイクや所作、洋服、女として生きる方法を教えたのはゲルダだということになるが、それに加えて、ゲルダの描いたリリーの姿が鏡となり、リリーの自己認識を助け、リリーという人格の形成に役立ったということも意味するだろう。鏡の前で男の身体を晒し自己を認識した時よりも、完全で美しい「女性」としてリリーが描かれるゲルダの絵画は、リリーが女性としてより完全なものになりたいという願いを助長する要素ともなったかもしれない。

IV. “The Danish Girl”

最後に、トム・フーパー監督および脚本家ルシンダ・コクソンがこの物語を愛の物語にするべく原作から改変したであろう点について考察する。原作と映画が異なる点は多々あるが、中でも筆者が注目したのが、映画はあまりにリリー中心の物語になりすぎている点だ。原作でゲルダはアメリカ人という設定で、これは史実とは異なる。アメリカ人のゲルダは、映画と同じようにデンマークの王立美術学院でアイナーと出会い、恋をするも第二次世界大戦の不穏な社会情勢が、２人を引き離す。ゲルダは故郷であるカリフォルニアに戻り、アイナーとは会えないままテディという男性と結婚し、子供を身籠るものの流産してしまう。その後テディも結核によりこの世を去る。ゲルダは左手にはテディにもらった結婚指輪をはめ、右手にはアイナーからもらった結婚指輪をはめているのだった。結婚指輪を右手には

めるというのは、ゲルダの好きなデンマークの習わしだった。原作の小説の特筆すべき点であり筆者の好きなところでもあるのが、リリーとゲルダ、2人が歩んできた人生だけそれぞれのエピソードが豊富で、2人の人生に厚みを感じられる点だ。

映画でも少し出てきた、アイナーが少年の頃、幼馴染で親友だった少年ハンスとの初めての秘事についても詳細に語られている。

ハンスはエプロンを手にアイナーに近寄ると、それを丁寧に彼の腰に巻いた。ハンスは、実際には長くないアイナーの後ろ髪をまとめ上げる仕草をして、うなじに触れた。「こんな遊び、したことある？」ハンスは齧り過ぎてすり減った爪でアイナーの首筋を撫で、彼の耳もとにとろけるような声で囁いた。　ハンスがエプロンの紐をさらにきつく締めた。戸惑いと同時に恍惚感で満たされたアイナーは、息を大きく吸い込むためにあばら骨が持ち上がるのを感じた。(『リリーのすべて』より引用)

この後すぐにアイナーの父が現れ 2 人の秘密の遊びは二度と行われることはなかったが、原作の小説ではアイナーがリリーになる時、この時の情景を思い出すシーンがある。映画ではずっと心に秘めていた、後から思い出されたこととして、ゲルダにリリーが恐る恐る打ち明けるシーンがあるが、小説ではそもそもリリーがリリーとしてこの世に生を受けた原体験として初期段階でリリーに思い出されている。

また、原作では、あくまでゲルダも1人の人間として人生を送っているさまが描かれており、彼女は少女の頃何を思い、カリフォルニアでの安定し退屈な日々を抜け出しデンマークに住むことを夢見たのか。前の夫とは何があったのか。原作では彼女の視点から詳細に書かれている。映画では映画の尺という問題もあるものの、原題『The Danish Girl』が邦題では『リリーのすべて』と訳された通り、リリーの人生が主軸となり、あくまでゲルダはリリーがリリーらしく生きることを戸惑いながらも支える献身的な妻として登場する。しかしゲルダにだって彼女の人生があるはずだ。

原作は、デンマークに住むことに憧れたアメリカ人の少女と、ずっと男性の心の中に秘められていた少女が、デンマークの1人の女性になる過程を描く物語である。この原題の"The Danish Girl"があらわす"デンマークの少女"はリリーのことだけでなく、2人を指すのではないだろうか。ちなみに、原作ではゲルダとリリーは共同生活を送った時期もあるもののそれぞれが新しいパートナーと出会い、結婚を考える。ゲルダはアイナーの幼馴染であり、2人の良き理解者であるハンスと、リリーは、初めてリリーはリリーとして外へ出た時に出会い、恋に落ちたヘンリクと。ゲルダとリリーの2人は確かな愛で結ばれていたものの、それぞれの人生を生きていたのだ。

実際の人生は、フィクション通りに美しく物語が結ばれるとは限らない。史実でも原作の小説とはまた異なるパートナーを 2 人は見つけ、別居している。しかしこれは薄情な結果などではなく、2人が自分の人生を全うした結果だと、そう思う。2人が自分という存在が

自分の人生の中で精一杯生きられるように行動した。それだけだ。しかも、2人の間に性別を超えた無償の愛がなければ史実、原作、映画全てに共通する 2 人の関係性は見えてこないだろう。ゲルダにもゲルダの人生があり、彼女にも抱えるものがたくさんある中でリリーを支えてきたという原作を読むことで、2人の人生への解像度がぐっと上がる気がした。

V. 自己追求とは

"Eddie Redmayne, who plays Lili/Einar, agrees, "This is a story of authenticity, identity, and courage, but at its heart it is a love story…about the courage that it takes to find yourself – to be yourself. Between the Wars came fun and discovery…and urgency. When you've seen so much death and the shortness of life has been underlined, there's the fact that you only have one shot at your time on Earth. How are you going to live it? Veiled and hidden, or are you going to live a life authentic? " (1)

(リリー／アイナー役のエディ・レッドメインは「これは真実、アイデンティティ、勇気の物語ですが、その中心はラブストーリーです…自分自身を見つけること、つまり自分自身でいるために必要な勇気についてです」と語っています。二つの大戦の間では、楽しさと発見、そして緊張感がありました。多くの死を目の当たりにし、人生の儚さが強調され、地球上で生きられるのは一度きりだという事実を意識します。それをどう生きるか。ベールに包まれて隠されたままでいるのか、それとも本物の人生を生きるのか？)（SETDECOR 2015 訳は引用者による。）

リリー／アイナー役を演じたエディは、筆者がこの作品に対して感じることを明確に言語化し、一つの問いを与えてくれる。我々は普段、自分が何者であるかを深く考える機会は少ない。しかし、自分が何者であるかを規定するのは常に他者でもある。リリーという人物は、はじめからアイナーの中に棲み、ゲルダによって姿を与えられ、完全な肉体になるために当時の人類では未知の挑戦をした。しかし、自然発生的に描かれるリリーという存在も、はじめは幼馴染のハンスに恋し、キスをされ、人格がめばえたのであればその存在自体に他者の存在が影響している。そもそも、自分の立場に戻って考えてみると、自身を他者に紹介する時、自分を何と規定し、説明するのか。まず苗字は祖先から伝わるもので、名前は親が決めた名前だ。自分だけの知り合いと会う時は、他者からもらった自分の名前で呼ばれるが、家族の知り合いに会ったら必然的に、その人の知る家族との関係上の呼び名で呼ばれる。人は、必ず他者によって規定された存在であるのかもしれない。結局リリーも、自己を追及したとはいえ、ゲルダや友人たちの支えがなければ追及していく行為そのものが継続できなかった。この物語を通じて、筆者の考えた「自己追求」とは、他者に規定された自己と、自身の中に渦巻く感情の赴く方向を一致させ、違和感をなくしていく作業ではないだろうか。それを怠った者は、エディの言うようにベールに隠されたまま短い一生を終え、それを追及した

者は、本物の人生を生きられるのかもしれない。リリーはその作業を根気強く続け、ついになりたい自分になることができた。筆者も、自己をおざなりにせず、きちんと向き合ってみたいものだと思った。

〇参考文献

『リリーのすべて』早川書房　デイヴィッド・エバーショフ著、斉藤博昭訳

『〈女らしさ〉の文化史　性・モード・風俗』中央公論新社　小倉孝誠著

『疾風怒濤精神分析入門 ―ジャック・ラカン的生き方のススメ―』誠信書房　片岡一竹著

『幼児の対人関係』みすず書房　M・メルロ・ポンティ著、木田元・滝浦静雄訳

『ラカン――鏡像段階』講談社　福原泰平著

(1) Tom Hooper: THE DANISH GIRL – SETDECOR(2015)、2022 年 1 月最終閲覧
https://www.setdecorators.org/?name=Tom-HooperTHE-DANISH-GIRL&art=tom-hooper-the-danish-girl

(2)夫が女性になっても愛し続ける　実話に基づく映画『リリーのすべて』が描く優しさ(2016)、2022 年 1 月最終閲覧
https://wotopi.jp/archives/35451

(3) Director Tom Hooper Brings The Danish Girl To Life – Below the Line(2015)、2022 年 1 月最終閲覧
https://www.btlnews.com/awards/director-tom-hooper-brings-danish-girl-life/

(4) How Eddie Redmayne's Transgender Role in 'The Danish Girl' Went From "Commercial Poison" to Oscar Contender - THE Hollywood REPORTER(2015)、2022 年 1 月最終閲覧
https://www.hollywoodreporter.com/movies/movie-features/how-eddie-redmaynes-transgender-role-842097/